

通信衛星と私

株式会社ジェピコ
平松 尚子



まず私の勤務する株式会社ジェピコについて簡単に紹介したい。当社は1972年設立、事業内容は、1.自社開発製品の設計、開発、製造（ファブレス）および国内販売、輸出販売、2.半導体および電子部品の輸入販売、3.システムインテグレーションおよび受託開発で、宇宙向け高信頼性部品の調達業務は1980年代前半からスタートした。以降、部品調達にとどまらず、宇宙及び地上向けのシステム開発までその範囲を広げている。私はその商社機能の部門と、受託開発部門に携わってきた。しかしながら、ここではいちユーザーとしての視点を中心に、日常生活の中で感じているようなことを絡めて話したいと思う。

一家に一台が主流になる少し前、初めての海外生活に出る私と連絡を取るために、実家にパソコンがやってきた。ステイ先の家庭ではインターネット環境が整っておらず、現地校で設置されたばかりの、学生が使えるパソコン室を利用していた。ちょっとした辺境地であったことから郵便事情が悪すぎたのもあるが、日本の友人とは片道二月以上かけて文通していた。季節も移り、近況が近況でなくなりそうな頃に、お互いの様子を知っていた。家へ電話をするにもオペレータにつないでのコレクトコールで、うっかり長話してしまうと、あっという間に数万円の料金となり、父親に釘を刺されたものである。

その後も、また留学へ出たり仕事に行ったりと、数年間海外で生活する機会があったが、このときも当初現地のパソコンでは日本語が打てず、ローマ字打ちの読みづらいメールで連絡をしたり、家族に顔を見せようと外付けカメラを持って行って見たものの、回線状況が悪くて使うのをあきらめたりしていた。世界は今ほどグローバルでも便利でもなかったことが懐かしく思い出される。

それから十数年で生活は一変した。今やインターネットはそこここで利用できる。ネットを通じて国際ビデオ会議が出来、会議資料の共有も簡単だ。各拠点から同じ画面を覗くことができ、話者は資料のどこについて話しているのか、共有画面上で示すことが出来る。個人でも手のひらサイズのスマートフォンを使い、画面のタッチ一つでビデオ電話が出来る時代である。Wi-Fi環境下では、国際通話も無料利用できるサービスがある気軽さである。スマホ、タブレット端末が広く一般的になり、下はデジタルネイティブと呼ばれる子供たちから、スマホデビューするシニア層まで、利用者は幅広い世代に及

ぶ。昨年スマホデビューした両親からは、定期的に写真やメッセージが届くようになった。未だ慣れずにブレブレの写真が届くことも多いが、それも話題の一つだ。

海外でもスマホのGPSで精度高くナビをしてくれて、スムーズに目的地へたどり着ける。きよろきよろしながら地図を広げて、あっちへ行ったりこっちへ行ったり、観光客丸出しなんて危なっかしいことはもうなくてよいのだ。少々道を間違えても、地図アプリが即座に再ルートして道順を教えてくれる。それをサッと一瞥して素知らぬ顔で行けば、あたかも現地民、あるいは、現地に精通した“通”の顔をして歩けるのである。“便利”は“安全”をもたらしてくれるツールだと常々感じている。

情報も容易に手に入る。新聞のウェブ版でデイリーなニュースを追う事ができるし、日本のテレビ番組だって、衛星放送やネットでタイムラグなく観ることが出来てしまう。海外での長期滞在後に感じていた“浦島太郎”な気分は、それこそもう“昔話”だ。

動画投稿サイトや、ソーシャル・ネットワーキング・サービス(SNS)、各種アプリの登場も、大きな波を起こしている。ここ数年の間に数々リリースされ、スマホ普及とともに爆発的に利用者が増えている。SNSを通して繋がることで、日々互いの近況を写真や動画付きでタイムリーに伺い知ることが出来るようになった。わざわざ一人ひとりに宛てなくとも、知らせたい情報を広く発信できる。疎遠になっていた旧友と、海外の連絡先も分からなくなっていたような友人と、十数年ぶりにばったり“ネット再会”を果たすこともよく聞く話だ。

あらゆる情報を気軽に発信できることで、人との交流の仕方やコミュニケーションの形態も変わってきている。SNS上で共通の興味を持つ仲間を容易に見つけることが出来たり、自身のアイデアに賛同してくれる人を募って事業を立ち上げたり、ネットの活用方法は様々だ。ある海外の友人は、動画投稿サイトで日本の面白いプログラマーを見つけたと言って、作者にコンタクトしたところ意気投合、来日して共同でモバイルアプリの会社を立ち上げた。他にも、ファッション雑貨のウェブショップを運営し、着こなし紹介の動画を発信したり、自分の演奏動画をアップして、CD製作の資金をクラウドファンディングで集めようとしていたりしている友人など、身近でも様々な目的で情報を発信している。

企業においても、ネットは必要不可欠なツールだ。ホームページは勿論、例えば、SNSを使って懸賞に応募出来たり、CM起用タレントがある期間CM画像や告知をSNSから配信する形でファンに追いかけてさせたりといった仕掛けを作っている。個人でも企業でも、数年前これら媒体がここまで広がる以前には思いもよらなかった形で、新しい『需要』と『供給』を日々生みだしている。こうして書き連ねた事項も、数年すれば昔話になってしまうだろう。



▲ Japan Aerospace 2010出展時、筆者：後列一番左

さて、私が縁あってジエピコに入って8年になる。全く異なる業種から来たけれど、海外と日本サイドとの交渉や調整という軸の部分では自分の担う仕事は変わらない。7年間、主に衛星やロケット搭載用の宇宙用高信頼性部品を、ヨーロッパやアメリカのメーカーから調達する業務に従事してきた。宇宙用部品の調達は、放射線耐性や、高い信頼性を裏付けるための様々な試験など、一般品とは違った特殊要求事項があり、困難に感じるものも経験してきた。そうして届いた部品たちだが、通常扱ってきたのは片手で持っても十分余るほど小さな電子部品のパーツばかりで、「これが数万円、数十万円もするなんて・・・」と眺めた事は、一度や二度ではない。うっかりすると、簡単に壊してしまいそうで、特に高額製品の梱包を改める際は緊張を覚えたが、宇宙に飛んでいく機器に使用されると言っても、自分からは遠いことのように思えた。



▲ Paris Air Show 2015参加時

あるとき機会を頂いて、ロケットや輸送機の製造工場を見学させてもらった。その大きさに圧倒され、また、説明を受けて指差された機器の中、その大きな筐体の中の一部に我々の調達した小さな部品が組み込まれているのかと目を見張った。日々の業務が、技術の進歩や、自分たちの生活の安全や便利を支えるものづくりにつながっていること、調達という役割を通して、微力ながらもそこに関わっているということを感じ深く思った出来事であった。

昨夏からは、衛星通信の移動体地球局を扱う業務に就くこととなった。仕様・技術検討から海外サブコンでの製造・品質管理、運用サポートまで、トータルで当社が担う。私の業務はここでもやはり海外メーカーと日本サイドとのコーディネーションである。部品と違ってシステム丸ごとを納めるため、試験で実際に衛星と通信する現場に立ち会うこともあり、“宇宙”に関わる仕事をしている意識は以前より高まったかもしれない。現在は洋上で使用されるターミナルの開発・運用に関わっているが、同部署より過去に納めた製品は対災害用通信局としても利用されている。

多様化するニーズにともなって、インターネット環境はいよいよ地球上いつでもどこでも求められるようになってきている。地上通信網がかなり充実している日本だが、それでもつながりにくいエリアはまだある。空域では、複数の航空会社で機内Wi-Fiサービスが開始され、どこでもオンラインでいられる環境が広がっているが、では海域はどうか。また、ひとたび災害が発生すると、陸でも途端につながらなくなってしまう。近年各地で発生している災害を通じて、SNSを使った連絡や情報収集の有用性がフォーカスされるとともに、災害に強いネットワークの重要性が一般ユーザーにも広く意識されている事だろう。通信衛星の利用が今後もっともっと求められるのは必至だ。今後発展していくビジネスとしてより一層の拡大を望むとともに、いちユーザーとしても、通信衛星の将来に期待している。■